

Title	資料 慶應図書館所蔵の『共産党宣言』初版について
Sub Title	The first edition of "Communist manifesto" in the library of Keio university (Tokyo)
Author	橋本, 直樹(Hashimoto, Naoki)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2019
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.112, No.1 (2019. 4) ,p.65- 73
JaLC DOI	10.14991/001.20190401-0065
Abstract	
Notes	特集：マルクス：過去と現在
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20190401-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



慶應図書館所蔵の『共産党宣言』初版について

橋本直樹*

慶應図書館所蔵の刊本を筆者が実検、調査したのは、2004 年 11 月 15 日（月曜日）であったから、もう 15 年も前のことになる。その折の閲覧に際しては、当時、慶應義塾大学三田メディアセンター貴重書室ご担当の市古健次さんにお世話頂いた。市古さんのご厚意には衷心より感謝したい。午後 1 時から午後 4 時までの 3 時間であった。その所見については、同年 12 月の初出稿に記載したところである。同稿はその後、取りまとめた拙著に収録してある。その記載においては、もっぱら慶應義塾蔵本が『共産党宣言』初版「23 ページ本」の各印刷異本のうちどの異本に属するか、その同定を目的としていた。

本稿では、もっぱら慶應図書館所蔵刊本を見るうえで必要な事柄にのみ限定して、簡潔に記載することとした。⁽¹⁾

そもそも慶應義塾蔵本を筆者が知るきっかけとなったのは、2003 年から 4 年間にわたって『宣言』についての科研費が採択され、⁽²⁾ その関係で世界各地の初版およびその関係書籍の所蔵状況を調査していた最中である。新たな所蔵先を見出したなら実際に見て、その所見を取りまとめるといった作業を行っていたのである。そのため、今では誰しも行おう作業であるが、その間、定期的に各国語で『宣言』のキーワードをインターネットの検索欄に入力し、そこでヒットする重要と思われる蔵本等

本稿は、2018 年 9 月 6 日（木曜日）、慶應義塾大学三田キャンパス 大学院棟 1 階 313 教室で開催されたマルクス生誕 200 周年記念コンファレンス「マルクス——過去と現在」での拙報告「慶應図書館所蔵の『共産党宣言』初版について——23 ページ本の組成・異本の指標・慶應義塾蔵本の特徴——」の要旨である。なお、コンファレンスのコーディネーターである大西 広 慶應義塾大学教授、司会をしてくださった坂本達哉慶應義塾大学教授、経済学部長 池田幸弘慶應義塾大学教授をはじめ、図書館貴重書担当の方々等、関係各位および慶應義塾経済学会には大変お世話になった。記して謝意を表する次第である。

* 鹿児島大学名誉教授

をチェックしていたのであった。その1つとして三田メディアセンター(図書館)蔵本が挙がってきた。筆者はそれまで、国内に23ページ本が所蔵されているという情報を持っていなかったため、慶應義塾に所蔵されているということには半信半疑であった。しかし、所蔵状況のデータを見ると、1848年刊の初版23ページ本であることに間違いはない。その後、所定の手続きを経て、実検する機会に恵まれ、所見を取りまとめることとなったのであった。

I 『共産党宣言』初版と「23ページ本」の各異本

これまで『宣言』の初版と擬された版本は

3つあった。通常、それぞれ、「23ページ本」、「30ページ本」、「ヒルシュフェルト版」と呼ばれている⁽³⁾。

『共産党宣言』の初版が「23ページ本」であることは現在、もはや定説となっている⁽⁴⁾。もちろん慶應義塾所蔵の版本はこの初版「23ページ本」である。

初版本である「23ページ本」にも種々の印刷異本(Druckvariante)がある(以下、煩瑣を避け、異本とだけ記す)。また、原刊本は伝承をみないが、かつて作成された写真等の複製のみ伝存しているものもある⁽⁵⁾。それらは別にして、版本が実際に今に伝承されている26冊だけで見ると7~8種類ある⁽⁶⁾。

-
- (1) 筆者は、最初の調査時以来、原刊本を再度実検する機会に恵まれていない。そのため、コンファレンス当日は、当時の所見を取りまとめた初出稿(橋本直樹「慶應義塾大学三田メディアセンター貴重書室蔵『共産党宣言』23ページ本所見」マルクス・エンゲルス研究者の会『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第43号、八朔社、2004年12月、108~112ページ。後、拙著『『共産党宣言』普及史序説』八朔社、2016年に第4章第II節として収録)を多少簡略にして紹介し、その後の調査結果(本稿第III節)を加えて報告した。

なお、初版といい、初刷といい、版や刷という言葉を正確に説明するのは、DTPの普及した今となってはなかなか困難である。ここでは数十年ほど前まで我が国でもまだ一般的であった活版印刷において通常使用されていた用法に即している(拙著第2章、脚注3、45/46ページ)。

- (2) 2003~2006年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究課題名「『共産党宣言』初版の出版史・影響史についての研究」(研究代表者:橋本直樹、課題番号:15530131)。
- (3) 拙著を取りまとめる際にはよく知られていることかと判断し、拙著23ページでは典拠を挙げなかったが、エルンスト・ドラーンについては、例えば、Drahn, Ernst: *Marx-Bibliographie. Ein Lebensbild Karl Marx' in biographisch-bibliographischen Daten. Erstes Heft: Karl Marx' Leben und Schriften, Zweite, verbesserte und erweiterte Aufl., Berlin 1923, S. 16* 参照。その1848年の項に、*Manifest der Kommunistischen Partei, Veröffentlicht im Februar 1848. (24 Seiten.) Druck von R. Hirschfeld, London 1848. 8⁰. (Verfasser Friedrich Engels und Karl Marx.)* とだけ、『宣言』については記載されている(下線は橋本)。
- (4) 詳細は上掲拙著第1章「『共産党宣言』初版の確定」参照。ヒルシュフェルト版を所蔵する法政大学大原社会問題研究所の当版本の紹介サイトにおいてもそれが初版でない旨、記されている(<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/tenji2/kyosanto30.html>)。
- (5) 現在にまで原版本が伝承されておらず、その種々の複製のみが知られている23ページ本のうち、アンドレアスが「1D」と、またクチンスキーが「刷X(Druck X)」と名付けた注目すべき異本については、本稿では割愛したその印刷特性も含め、拙著第3章「『共産党宣言』23ページ本の表紙・各ページの複製について」参照。

世界で 27 冊目となる慶應義塾所蔵の版本は、それら異本のうち異本 4、異本 5、異本 6-1、異本 6-2 のグループに属するものと 2004 年の「所見」稿において筆者は判定した。

一般に 23 ページ本と称されているが、実際は 23 ページの裏面に空白の第 24 ページ目のある、全 24 ページからなる仮綴じ本 (Broschüre) である。

『宣言』23 ページ本は、誤植等その印刷の特徴を見る場合には、①緑色の表紙部分、②第一折り部分、および③第二折り部分という三つの部分の組み合わせとして考慮する必要がある⁽⁸⁾。

II 慶應図書館蔵本の特徴と異本の種類の同定

1. 表紙

本刊本は刊行当初の表紙が残されていない。後に製本する際に、通常の仮綴じ本への処理と同様に取り去られてしまったからである。

2. 本文用紙の紙質

第一折りおよび第二折りの用紙いずれも、在来原刊本と同じ印象である。連邦文書館ドイツ民主共和国諸党および大衆諸組織文書館

(SAPMO) 蔵本にあるゴワゴワとした手触りのようなものには欠ける。アムステルダム大学図書館蔵本と比べると × の形で交差している表面の梳き縞のようなものがはっきりしていない。また、わずかに変色の度が強いようにも感じられる。しかし、これらの相違はその後の保存状況によって生じ得る変化の範囲を越えていないものと思われる。

なお、第二折りが表刷か裏刷かを紙の特徴から判別することはできなかった。これは第二折りが通常の印刷ボーゲンの半分のページ数であるところから出てくる事柄である⁽⁹⁾。

3. 第一折り

(1) 扉 (第 [1] ページ目) とその裏面 (第 [2] ページ目)

1) 扉 (第 [1] ページ目)

扉の特徴は次の通りである。

① 1 行目の Manifest の語頭の M の中には小さな黒点がある。

② 3 行目の Kommunistischen Partei. の行末にはピリオドがある。

③ 4 行目にあたる箇所には双柱ケイを欠く。

④ 刊年月を表示する 5 行目の数字 1848 中の 4 の字体は、原刊本が伝承されている

(6) 拙著第 2 章「『共産党宣言』初刷の確定」、70/71 ページ参照。

(7) 表紙の印刷については、表紙専用の小型の印刷機が別にあった可能性をも考慮に入れておく必要がある。また、いくつかの伝承版本には表紙を 2 度折って、4 分の 1 大にした結果であろう、十文字の折り跡が残されているものがある。出版当時、『宣言』の実際の刊行母体であった共産主義者同盟や刊記に記載されている刊行母体ロンドン・ドイツ人共産主義労働者教育協会のメンバーであって、配布を受けたり、購入したりした持ち主が、おそらくこうして四つ折りにし、ポケットに入れて常時持ち歩き、折を見て読んでいたのではなかろうか。

(8) この点は、23 ページ本の各印刷異本を把握する際に、非常に重要な点なのであるが、従来必ずしも明瞭に意識されてこなかっただけに特に強調しておく必要がある。

(9) 拙著、58 ページ参照。

印刷異本 1~7 の従来の字体と異なるところはないように思われる。

⑤その行末にはピリオドも認められる。

⑥6行目には表ケイがある。

扉についてのもっとも重要な識別指標は、二つの罫線の有無である⁽¹⁰⁾。それ故、罫線を一見したところでは、③および⑥の特徴を持つ慶應義塾蔵本の扉は、アンドレアスの 1D あるいはクチンスキーの刷 X の原刊本のようにも考えられてくる。しかしながら、他方で、罫線以外の扉の④他の特徴や、以下にも見る通り、二つの折りの各ページの印刷の特徴は、従来の異本 1~異本 7 と同様で、1D あるいは刷 X とはまるで別である。

この双柱ケイが見出されないという点についての筆者の推測は後述する。

なお、このページに書き込みといったものは見出されない。

2) 第 [2] ページ

扉の裏、何も印刷されていない空白のページであるが、右側の対ページである第 [3] ページの第 1 行目に相当する高さの辺りから、1206221445 と、また、行を替えて「120X/722/1」（ / は行替え）と手書きされている。これは慶應義塾大学での現在の所蔵番号（BOOK ID）およびコールナンバー（請求番号）の記入であろう。

(2) 第一折り第 [3] ページ目以降の特徴

まず、クチンスキーの指摘している 7 つの

印刷上の汚れが⁽¹¹⁾すべて見出されるので、その記載は本稿では割愛する。この特徴から慶應義塾蔵本が『共産党宣言』の初版 23 ページ本であることはまったく間違いのないところである。

1) 第 [3] ページ

章見出しのローマ数字 I の印刷は、上端右側が欠けることなく、在来原刊本の印刷と同様である。1D・刷 X の特徴を持たないわけである。

2) 第 6 ページ

53 行目には heraus と誤植のままに印刷されており、その前後は整っている。活字の損傷等は見出されない。これは、慶應義塾蔵本が、悪活字で植字されたものの herauf と誤植のない印刷異本 1~3 に属する刊本ではなくて、印刷異本 4 以降に属する刊本であることを明瞭に示している。

3) 第 11 ページ

ノンブルの印刷は在来原刊本と同じく、通常の印刷である。したがって、1D・刷 X の特徴は持っていない。

第 II 章見出しの文字の印刷は、おそらくかつてこの行の近辺に何か書き込みがあって、それを抹消したために、10 行目から 13 行目まで印刷インクが薄くなるという影響を被っているが、その他は在来原刊本の通常の印刷と異なるところはない。

36 行目の erfunden, また、48 行目の Producte もきちんと植字されており、誤植はな

(10) 拙著、48~50 ページ参照。

(11) Kuczynski, Thomas : Editionsbericht. In : Das Kommunistische Manifest, *Schriften aus dem Karl-Marx-Haus Trier*, Nr.49, Trier 1995, S. 80.

い。1D・刷 X の特徴を持たないわけである。

4. 第二折りの特徴

1) 第 17 ページ

ノンブルは 17 とあり、23 というような打ち損じはない。異本 1 ではないことになる。

2) 第 18 ページ

33 行目の行頭は、段落替えの通常通りの字下げがなされ、その分は空白となっているので、全角クワタの肩面の印刷の汚れは見出されない。異本 2 ではないということになる。

3) 第 23 ページ

13 行目の 1846 という数字の並びの中の 4 の字体は、まったく在来原刊本と同じである。また、44 行目の Länder の ä は a ウムラウトではなく、Lander というように a と誤植されたままである。これらの事実は本刊本が 1D・刷 X ではないということを示している。

その最終行から双柱ケイまでの行間はおおよそ 15mm 程度、双柱ケイ自体の長さも 21.5mm 程度で、いずれも在来原刊本とはほぼ同様である。

5. 扉に双柱ケイが見出されない理由の推定

扉に双柱ケイが見出されないのは次の理由によるものと思われる。

本刊本で双柱ケイのあるべき行の中央には、「慶應/義塾/図書/館之印」(縦書き 1 行 2 文字。最終行 3 文字。/ は行替え) という朱印が捺されている。この所蔵印は 1 辺が 5cm 弱の正方形の枠を持ち、扉の 3 行目と 5 行目(刊年月の記載)の行間一杯をとる形になっている。この所蔵印の捺された周囲の用紙をよく見ると、《3 行目と 5 行目の行間 5cm 弱》×《用

紙の外側から 3 行目の Kommunistischen の二つ目の m と続く n の間の辺りまで約 9cm》四方の部分の紙質が、それ以外の部分の紙質と異なっているように感じられる。また、透かしてみると、この部分にあたる横長の四角の形のところだけ、ちょうど透かしが入ったように光の透過の具合が良い。同じようなことが、扉のページの右上隅にも小さな細い横長の三角の形に見出される。

これは印刷異本の確定に際しては大変大事な点であるので、後の見学の際には(今後検討される方には)よく確認していただきたいところである。

光の透過が良い理由は判然としないのだが、紙が幾分か薄くなったためなのか、何か漂白剤等の使用により光の透過度が高くなったためなのか、部分的に薄く削り取られて補訂用の別の非常に薄い用紙があてがわれたかしたためなのか、いずれにせよ、そうした手が入って、その過程で、当初は印刷されていた双柱ケイがなくなってしまったのではないかという印象を、筆者は受ける。

おそらくは以前の所有者ないしは所蔵機関の蔵書印が捺されているなどしていたのであろう、それを抹消する作業が過去のいずれかの時点においてなされたためなのではないかと推測されるのである。

もちろん、この筆者の推定が誤りであるという可能性も決してないわけではない。その場合には、扉の 6 行目の表ケイだけを持つ新たな種類の異本の出現ということにもなるわけである。そうした意味において、非常に大事な事実認定であるため、後の見学時には(今

後検討される方には)よく確認していただきたい箇所である。

6. 印刷異本の確定

クチンスキーの指摘する印刷の汚れがいずれも確認できるので、初版 23 ページ本であるという点については間違いのないところである。

また、第 6 ページ 53 行目に heraus という誤植が見出されるところからは、印刷異本 4 以降に属する刊本であることが分かる。

他方、扉に双柱ケイを見出すことはできないものの、前記の何らかの理由による双柱ケイの印刷後の抹消という筆者の推定に誤りなきものとすれば、当初は扉に両罫線がいずれも印刷されていた刊本であるということになり、印刷異本 7 に属する刊本には当たらないと考えなければならない。

この点に加えて、本文の印刷上の諸特徴をも勘案すると、アンドレアスの 1D あるいはクチンスキーの刷 X の原刊本であるとみることはできなくなる。

結局、本刊本は、クチンスキーの分類に従って示せば、印刷異本 B4, B5, B6⁽¹²⁾ に属する刊本ということになる。それらのうちのいずれであるかの同定については、表紙が残されていないため、前回 2004 年の実検時には断念した経緯がある。このさらなる同定については、印刷異本 B4, B5, B6 各々を一刊本ずつではあるが、実検した経験からすると、種々の器具を用いた正確な調査を試みることで

できれば、また一定の推測も可能であるかもしれないと思われる。

こうしたより精度の高い検分を行うという点からしても、慶應義塾関係者の方による今後の検討結果が待たれるところである。

7. 装丁——伝承・来歴の探求の参考に——

さらに、本刊本の装丁の様子を紹介しておく。前述の通り、伝承・来歴については現在のところ容易には遡及等、調査が困難であるという事情、また、従来、解題等がまったくなされていないのではないかとこの事情に鑑みれば、下記のような不十分な紹介でも、関係者の今後のそうした探求に資するのではないかとと思われるからである。

装丁は、表表紙側から順に、表表紙、見返し 1 枚目、装丁用の用紙 1 枚目、装丁用の用紙 2 枚目、本文用紙 24 ページ分、装丁用の用紙 3 枚目、装丁用の用紙 4 枚目、見返し 2 枚目、裏表紙で構成されている。白い糸できつく綴じられているので、本文用紙の折り丁ともども、これらの用紙の折りの関係は窺いかねる。

背と上下両端隅に赤(臙脂?)色の革装がなされており、それ以外の部分の表紙用紙は赤・黒色のマーブル模様の厚紙である。

背の革表紙には最下端に「1848」と刊年が金文字で水平に打刻されているが、そのさらに上部はコールナンバーの記された紙のラベルが貼られているために見ることができない。さらにその上の部分には、同じく赤色の背革

(12) 筆者はさらにこれを B6-1, B6-2 とさらに二分できる可能性を示している(拙著, 66 ページ)。

表紙に金文字で刻印された標題が下部から上部へかけて垂直に Manifest der Kommunistischen Partei とある。

花布^きれは赤白縞、また、今では色が脱けてしまっているように見えるが、元は金色かオレンジ色であったであろうと推測される葉用の幅 7mm ほどのリボンが 1 本、上端に付けられ垂らされている。

見返し用紙は少し硬めの紙であって、表側が赤・黒・金色のマーブル模様、裏面は無色である。

この裏面の左上隅に、黒色の小さな活字のような字体で「□. □. □ EVITZKY」ないしは「B. □□ LEVITZKY」と読める記入がある。□は 2004 年の実検時には、筆者には判読できなかった文字を示している。今このコンファレンスに読める方が出席していらっしゃるのではないかと期待しているところである（今後検討される方には解説可能なのではなからうか）。かつての持ち主の氏名が記された跡かとも想像される。さらに、その下には Q17/187/1 と黒鉛筆で 3 行にわたる記載があり（ / は行替え）、2 行目の 187 の右脇辺りに青という漢字のようにも見える形の字 (?) が同じ黒鉛筆で手書きされている。

装丁用の用紙は、本文用紙より多少硬めの紙で、1 枚目、2 枚目ともに透かしが見られる。透かしは、1 枚目には Ingres と、2 枚目には L'Ecolier とそれぞれ上部に逆立ちした格好で認められる。1 枚目の語の頭文字はちょうどト音記号のような形であって、I と

は読めない字なのかもしれない。これも後ほど見学で（今後実検する）どなたかが正確にお読みになるのを期待している。

裏表紙側の装丁にさいしてのそれぞれの用紙は、表表紙側と相同であるが、裏表紙側の装丁用の用紙 2 枚には表側とは異なりいずれも透かしは見出されない。

以上の特徴を持つ装丁は、私見では、慶應義塾に収蔵される以前の所蔵者が行ったところではないかと思われるので、本刊本の伝承・来歴を調査するうえでの何らかの手がかりになるのではないかと期待しているところである。

III 来歴の検討のために

1. 拙初出稿公表後に知りえた諸事実

二種、ご紹介する。

一つは市古氏から 2005 年 3 月 2 日に頂戴した「来歴」というタイトルのメールである。拙初出稿をお送りした旨をお知らせし、併せて伝承の判明を期待した旨述べた同日の拙メールへの返信である。古い冊子目録をたどってくださり、以下の大変重要な事実を明らかにされた。

「当初の請求記号：Q7@183@1

購入日：昭和 14 年 7 月⁽¹³⁾

業者：丸善

値段：1 円 70 銭

請求記号変更日：1981. 9.30」。

もう一つは、この購入日と業者を手掛かりに慶應義塾ゆかりの方々や丸善にも照会等試

(13) メールでは「年」であったが、入力ミスであろうと判断し、「月」と訂正してある。

みた結果、明らかとなった情報である。とはいえ、次のお三方の外にはご返事は得られなかった。

まず、羽鳥卓也先生からの2005年3月15日受信の葉書である。その結論では「私の知っていない事柄」とされているが、「昭和14年購入の貴重書分類の書物ということですので、おそらく高橋誠一郎先生の御指示で購入されたものであらうと思います」とのことであった。

次に、当時、丸善の企画開発部にいらした木村潤一郎さんからの2005年3月16日のメールである。そこでは、「小社の古いアナウンスメントや學鐙の広告、記事、丸善社史など、記録されているのではないと思われる資料をあたりましたが見つかることはできませんでした。時間を見つけ、また調べてはみえますが難しいのではないかとされます」とのことであった。やはりその後、連絡を頂戴することはなかった。

そして、最後に、慶應義塾大学名誉教授の飯田裕康先生から2005年3月5日に頂戴したメールである。そのメールにおいては、飯田先生が『宣言』初版本について最初にお聞きになったのは、1959年の修士課程1年次の社会思想史演習担当の平井新教授からであったことや、慶應義塾内での貴重書購入には原簿があり、それにはいつどこからの購入かは記載されているものの、貴重書購入の選

定は委員会等で行うために、そもそも「誰が買ったかは記録されておられません」といった大変重要な諸事実をお知らせくださった。そして、「今のところ推測でしか申し上げられませんが、宣言初版の購入に踏み切る決断をなす人物は、当時いずれも経済学部教授であった小泉信三、高橋誠一郎の両先生しかおられなかった」とされ、「さらに調査を重ねてみたい」とのことであった。⁽¹⁴⁾

2. 慶應義塾蔵本は購入時にも貴重書だったのか？

前項の当時の筆者の照会等は、慶應義塾蔵の23ページ本が貴重書であるとの前提に立てなされたものであった。そのため、羽鳥先生も飯田先生も、貴重書の購入であることを前提にお考えくださったように思われる。

しかしながら、筆者にはその後、昭和14年の1円70銭という値段は、果たして貴重書の値段なのであらうかとの疑念が萌してきている。周知の通り、貨幣価値を、時代を越えて換算するのは大変面倒で難しいものである。とはいえ、当時の1円が仮に今の1万円程度に相当するものと考えてみると、現在でも1万7千円という古書価格は決して高額とも思われない。当時の『資本論』第1巻や『哲学の貧困』の初版の古書価格などが参考になる。⁽¹⁵⁾ それらに比べると、貴重書という扱い

(14) コンファレンス当日、拙報告後の質疑応答において、飯田先生から、高橋先生の可能性は非常に低く、やはり小泉先生ではないかとの趣旨のご発言があった。

(15) 例えば、大村 泉『新 MEGA と《資本論》の成立』（八朔社、1998年）第11章「マルクス稀観本の伝承」第1節「初版本の取引価格」および第2節「『哲学の貧困』自用本の第一同定者」、384～402ページに紹介がある。

ではなかったのではないかと考えられる。

23 ページ本は今でこそ『宣言』の初版であることが定説となっている。が、当時『宣言』の初版については、当初ヒルシュフェルト版が擬されていた経緯や、旧『メガ（マルクス・エンゲルス全集）』の考証以降は、30 ページ本が誤植の少ない正式の初版であると考えられてきた経緯がある。

また、扉は書籍にとって顔として、大変大事なページであるから、筆者の推測に基づくと、そこに本来あるべき双柱ケイが抹消されてしまっている点など、古書価格に何ほどか反映しているのかもしれない。

さらに、憶測になるが、昭和 14 年という時代である。よく知られているように、戦前の

日本では『宣言』の翻訳を所持していると、特高に逮捕される事態となった。原独語やその他の外国語版の所持は黙認されていたようではある。しかしながら、1848 年出版の刊本を国内で所持するのはそれなりの危険を伴っていたものと想像される。当刊本の販売に際して、丸善では昭和 14 年当時、特に古書リストに載せて宣伝するといったようなことはしなかったようであるので、国内の旧蔵者が丸善を通じて密かに早急に処分する必要があったといった事情が関係していたのかもしれない。

いずれにせよ、こうした点も含め、刊本の一層の同定等、慶應義塾関係者の方々の今後の検討に大いに期待したいところである。